

【研究ノート】

西洋中世自然哲学における寿命延長観

松山 裕貴¹

本稿では西洋中世において錬金術を医学、寿命延長論に結びつけたルペシッサのヨハネス (Johannes de Rupescissa, c.1310-1366) が、彼の主著である『全ての事物の第五精髓についての考察 (De consideratione quintae essentiae omnium rerum)』(1351-52) で提唱した「第五精髓 (quinta Essentia)²」に着眼することで、中世の不老不死・寿命延長観について考えてみたい。一般的に、錬金術は銅や鉛などといった卑金属を金や銀といった貴金属へと変化させるものとして考えられてきた。しかし、錬金術はそのような貴金属への変成³のみならず寿命延長を目指す動きもあった。それにも関わらず、寿命延長を絡めた西洋中世の錬金術の先行研究は DeVun の論文⁴ などがあるが、非常に限定的である。そしてとりわけ DeVun の論文は、第五精髓というよりもむしろ、ヨアキム主義的終末論を中心に記述されたものである。第五精髓についても、ルペシッサの著作以外ではアリストテレス自然哲学や、パラケルススにおける先行研究で述べられているに過ぎない。したがって、第五精髓についての議論は未だあまり深くなされておらず、ルペシッサに関する先行研究も非常に少ないと言って良い。そこで寿命延長と密接に関連している「第五精髓」に着眼することで不足している研究を補完していく。よって「第五精髓」について詳細な論考を残したルペシッサの著作を分析していきたい。

西洋において古代ギリシアのアリストテレス自然哲学が重要視され、火・水・空気・土から構成される四元素や温・冷・湿・乾からなる四性質⁵を基本として

1 東京大学大学院総合文化研究科修士課程。Email: yuki.matsuyama1549@gmail.com

2 「第五精髓」とは、月より上の世界である星辰界にある第五元素のことを示しており、腐敗の防止や不滅を可能にする性質を持っている。14世紀には第五精髓を用いて人間の寿命延長を可能にする試みがなされた。

3 錬金術においては、「変成」という用語を用いる。

4 DeVun (2010) を参照せよ。

5 四性質は温と冷、そして乾と湿が相反する性質であり、温と乾は火、冷と湿は水、温と湿は空気、冷と乾は土のように異なる二つの性質で四元素の一つを構成している。

寿命を延長する方法が模索されてきた。このような古代から続いてきた寿命延長の方法論は錬金術に対する深い理解を促進する可能性を持ったものであり、初期近代を生きたパラケルスス⁶ (Paracelsus, c.1493-1541) の方法論的転回に繋がっていくものである。

本稿の目的は寿命延長の手法として第五精髓を中心に考えることである。また寿命延長論は本来錬金術を基盤としているものであるから、貴金属への変成を論点として取り上げる必要もあるだろう。したがって錬金術の研究は金属の変成と寿命の延長を中心として考えていくことで、バランスが取れた議論を育むことができるはずである。

1. 第五精髓提唱の背景とベーコンの研究

第一節では、ルペシッサが寿命延長のために第五精髓の必要性を述べた背景について考える。また、ルペシッサに強く影響を与えた人物の一人とされるイギリスの哲学者であるロジャー・ベーコン (Roger Bacon, 1214-1294) にも着眼点を当てることで、ルペシッサが第五精髓という概念を導入するに至った事由を考察する。

1.1 第五精髓が提示された背景

第五精髓はラテン語ではクインタ・エッセンチアと言うが、自然哲学者は他に三つの名前、すなわち「燃える水 (Aqua ardens)」、「ワインの生命 (Anima vini)⁷」、「生命の水 (Aqua vitae)」で呼んでいた。

しかし、

Et quando tu voles eam occultare, vocabis eam quintam Essentiam, quia hanc eius

6 パラケルススの本名はテオフラストゥス・ボンバストゥス・フォン・ホーエンハイムと言い、後に自身をパラケルススと名乗った。

7 ワインの生命は別の名称として「ワインの精気 (Spiritus vini)」とも言った。

naturam et hoc nomen suum summi Philosophi nemini pandere voluerunt, sed secum veritatem sepeliri fecerunt...⁸

あなたがそれを隠すことを望むならば、それを第五精髓と名付けよ。というのは、最も偉大な哲学者の中でこの第五精髓の性質と名前を明らかにしたいと望む人はいないからである。それに伴い真実が隠されることがなされるのだ ...

と述べられているように、最も大いなる自然哲学者はこの物の性質と名前を明らかにすることを考えていないとルペシッサは考えており、その理由から他の哲学者が興味を持たない「第五精髓」という名称で呼ぶように促していた⁹。

そもそもルペシッサは何故第五精髓について言及しているのだろうか。これには、ルペシッサの経験が密接に関連している。ルペシッサは5年以上トゥールーズで自然哲学を研究していたが、その後キリスト教のフランシスコ会の位階に入っている。当時のフランシスコ会での思想はヨアキム主義的終末論¹⁰が主流であった。フィオーレのヨアキム (Giacchino da Fiore, 1135-1202) によって提唱された終末論では、キリスト教世界における終末に到来する「反キリスト¹¹」はキリスト教徒を迫害し、キリスト教世界を支配しようとする。ルペシッサはそのような未来で反キリストに対抗しようとして試みた。そこで、反キリストに対抗する方法として腐敗や破壊、また病気や老化を防ぐものが希求されてきた。ルペシッサはその需要を満たすものとして、アリストテレスや古代の医学者ガレノス、中世の哲学者であるロジャー・ベーコンの考えを基調に第五精髓をキリスト教徒たちに提示した。しかし、ここで重要な点として、ルペシッサは

8 Johannes de Rupescissa (1597), p. 17 を参照せよ。

9 「第五精髓」という用語は有名な言葉ではなかったため、当時の自然哲学者の興味を引くものではなかった。

10 ヨアキム主義的終末論は12世紀カトリック教会に興ったフィオーレのヨアキムによる思想であり、終末には反キリストが到来するがそれを退けた後は1,000年間の安全な世界を享受することができるというものを指す。

11 反キリストとはイエスの教えに背き、人を惑わす者を意味するが、これが一人を指すか複数人を指すかは定められていない。

キリスト教徒たちに対してのみ第五精髓を提示したのであって、キリスト教徒ではない人々は提示の対象ではなかったということである。というのも、これは『第五精髓についての考察』において “...ut hunc librum non permittat pervenire ad manus indignorum, vanorum, et avarorum...” 「... 持たざる強欲な人々にこの本が手に渡ることを許さないように...」¹²と記述されていることに関連していると考えられる。つまり、ここでの「持たざる強欲な人々」はキリスト教徒ではない人々を示していると捉えることができる。

以上のように、ルペシッサはキリスト教的な、とりわけフランシスコ会におけるヨアキム主義に基づいてキリスト教徒を保護するために第五精髓を提示してきた。

1.2 寿命延長に対するベーコンの体系¹³

ベーコンはルペシッサに多大な影響を与えたが、その点においてルペシッサの構築した体系はベーコンと共通している部分が多い。ここでベーコンの体系に触れておくことで、ルペシッサが『第五精髓についての考察』に記した内容に比較的容易に入っていくことができるだろう。

ベーコンが西洋中世において寿命延長に関して重要な役割を果たしたことは事実であり、彼はその生涯の中で寿命延長に関連する文献を7つ残している¹⁴。彼はそのような著書を記す中で、病気を治し寿命延長に繋がる普遍医薬への希求の考えを発達させてきた。また、彼は寿命延長の方法を天文学・錬金術・光学の三つの学問に見いだした。その中でも錬金術から生成された医薬は寿命を並外れた長さに伸長することができるとした¹⁵。ベーコンは聖書を引用することで、聖書に記述されている家長は1,000年間以上生きたとされており、人間の

12 Rupescissa (1597), p. 11 を参照せよ。

13 ベーコンの体系については、DeVun (2010), pp. 80–89. を中心に参照した。

14 7つの文献とは、*Opus maius: De scientia experimental, Opus minus, Opus tertium, Epistola de secretis operibus artis et naturae, Secretum secretorum cum glossis et notulis, Liber sex scientiarum, Lettre a Clement* のことを示す。

15 DeVun (2010), pp. 82–83 を参照せよ。

本来の寿命は聖書に登場する家長と同等であると述べた。このような聖書を用いて自身の言葉に信憑性を持たせる手法は当時では一般的であったと言える。

またベーコンは単なる寿命延長に関する見解のみならず、身体の腐敗への対抗についても述べている。これは、古代ギリシアに築かれその後パラダイムとなっていたガレノス医学やアリストテレス自然哲学に則るものであった。ベーコンが古代からのパラダイムに則ったのは錬金術を用いて成し遂げようとした目的が関係している。彼の目的は、錬金術によって身体を老年の状態から若年の状態に戻し不老不死に近い状態へ近づけることにあった。当時の医学の重要な基盤となるのが四体液説と呼ばれるものであるが、これは四元素の火・水・空気・土をそれぞれ黄胆汁・粘液・血液・黒胆汁になぞらえるもの¹⁶である。若く、健康であるならばこの四体液は均衡を保っておりアンバランスな比率となる事はない。しかし、体調を崩した場合や老年になるにつれてこの四体液の均衡性が崩れるとし、どの体液が過剰になり不足するかは病気の種類によって異なる。とくに老年が近づいた場合は四性質の乾と冷の性質が過剰となり、温と湿の性質が不足してしまう。当時の治療としては、私たちが住んでいる地球、すなわち月より下の世界と考えられた月下界¹⁷にある物質はそれぞれ決まった四元素が含まれているとされており、不足している四体液と同じ四元素の物質を投与していた。したがって、ベーコンが目指していた若年の状態へと戻すことの意味は四体液説における温と湿を持つ物質を与え続けることであった可能性がある。

以上のようにして、ベーコンは錬金術における寿命延長と身体の腐敗の対抗を提示した。これが後にルベシッサがフランシスコ会で第五精髓を想起する事由であったことは1.1にて述べた通りである。

2. ルベシッサの体系からパラケルススの体系への転回

16 中世の自然哲学ではアナロジーを重要視する風潮があり、例えば金の性質は太陽の性質と同様のものを持っているとされた。

17 当時のコスモロジー観は地球を中心とした天動説(地球中心説)であり、内側から地球、月、太陽、金星、水星、火星、木星、土星が配置されるように考えられた。

第二節では、ルペシッサが『第五精髓についての考察』において述べたことを踏まえながら第五精髓についてより深く考察してみたい。更には、ルペシッサの体系を引き継いだ初期近代の医者・錬金術師であったパラケルススがどのような寿命延長の体系を構築したのかを考える。

2.1 ルペシッサの体系

1.2 においてベーコンの体系がルペシッサに影響を与えたことは既に述べた。しかし、ルペシッサに影響を与えたのは単にベーコンだけではない。ルペシッサはガレノスの四体液説やアリストテレス自然哲学からも考えを着想している。また、それにとどまらず哲学者・神学者であるライムンドゥス・ルッルス (Raimundus Lullus, c.1232-1315) や医者・錬金術師でもあったヴィラノバのアルナルドゥス (Arnaldus de Villa Nova, c.1235-1313) からも影響を受けている。とりわけ、アルナルドゥスはルペシッサ以前に錬金術と医学を結びつけた人物でもあった。彼はその生涯においてベーコンと同様に寿命延長に関する研究に従事しており、独自の体系を構築したと言っても良いだろう。

ルペシッサはそのような先人たちが構築してきた知見から体系を組み立ててきたのであり、決して彼らの体系を 180 度転回するようなことはしていないと言える。ルペシッサは大きく二つの文献を残しており、それらは『光の書 (Liber lucis)』 (c.1350) と『第五精髓についての考察』である。両著共に、錬金術を用いて終末の反キリストによる被害や支配に抵抗することを目的として著された書物として知られている。そこで『第五精髓についての考察』を中心に考察してみることでその真髓に迫りたい。

彼は初めに聖書を引用し、

Mihi autem dedit Deus dicere ex sententia, et praesumere digna horum quae mihi dantur: quoniam ipse sapientiae dux est, et sapientium emendator.

知識に基づいて話す力、恵みにふさわしく考える力を、神がわたしに授け

てくださるように。神こそ知恵の案内者、知者たちの指導者であられるから。(知恵の書 7:15)

を引き合いに出して¹⁸世界の創造について述べる。『知恵の書』が示すには、神が世界の知識や真実を私たちに伝えたとしており、この知識や真実には元素の性質や時間の根源やその区分、一年の天体の運行、星の配置、動物の性質、植物の区別などが含まれる。また、“*Universa propter semetipsum operatus est Dominus; impium quoque ad diem malum.*”「主はすべての物をおのおのその用のために造り、悪しき人をも災の日のために造られた。」(箴言の書 16:4)においては神が全ての事物を創造したことが記述されているが、ルペシッサはこれより以下のことを主張している。それは、“*...quod universa Philosophia, quam Solomoni in verbis praemissis Spiritus Domini revelavit, est ad Dei servitium...*”¹⁹「...前置きとして言われたソロモンの言葉の中で神の聖霊が明らかにした世界の哲学は神への従属のためである ...」に引用されるように、世界の構造を明らかにする自然哲学は神への従属のために使用されるということである。これが意味するところは、聖書は神の言葉を代弁したものとして扱われているため、自然哲学において聖書が必要であることを正当化したことであつた。

この点にあつて、自然哲学を研究するにあたり “*...potest homo incommoda senectutis...curare...*”²⁰「...人間は老人の苦悩を癒すことができる ...」と記されているように、人間が神によって与えられた知識や秘密の本性を用いることで、老年の苦悩を治癒することができるとしている。具体的には、それは既に失った若年の時間を取り戻し、その時持っていた力や能力を同程度ではないにしろ再度手にすることができるということである。さらに、

Nam et qui sumus in hoc tabernaculo, ingemiscimus gravati: eo quod nolumus expoliari, sed supervestiri, ut absorbeatur quod mortale est, a vita.

18 Rupescissa (1597), p. 8 を参照せよ。

19 Rupescissa (1597), p. 9 を参照せよ。

20 Rupescissa (1597), p. 12 を参照せよ。

この幕屋の中にいる私たちは、重荷を負って苦しみもだえている。それを脱
 ごうと願うからではなく、その上に着ようと願うからであり、それによっ
 て死ぬべきものが命にのまれてしまうためである。(コリントの信徒への手
 紙二 5:4)

を引用することで、ルペシッサは、全ての人々は消滅し腐敗する身体を保護す
 ることができる物質を探していることを述べる。このルペシッサの試みは“Ergo
 radix vitae, est quaerere rem de se (si staret in aeternum) incorruptibilem...”²¹「それ故
 に生命の根源は(永遠に存在するならば)そのものについての不滅の物質を探求
 することである ...」にも見られる。続く“...quae...et maxime carnem, semper teneat
 incorruptam...”「...それは... とくにいつも肉体を不変に保つものである。...」と
 言われるように、そのような身体を保護する物質は一時的でなく、永遠にその
 状態を維持するものとして機能することが信じられていた。

このような寿命延長や不老不死に対して楽観的な主張もある一方で、悲観的
 な内容も聖書の中に記述されている。とくに、ルペシッサが引用した聖書の内
 容の“Et statutum est hominibus semel mori ...”²²「人間は一度だけ死ぬことが(神
 によって²³)定められている ...」(ヘブライ人の手紙 9:27) が意味するところは、
 人間の身体が死から不死を取り戻すことができるようなものを探すことは幻想
 に過ぎないと断定しているところにある。神が人間の寿命を定めた事に関して
 は、ルペシッサの引用“Breves dies hominis sunt: numerus mensium ejus apud te est:
 constituisti terminos ejus, qui praeteriri non poterunt.”「その日は定められ、その月
 の数もあなたと共にあり、あなたがその限りを定めて、越えることのできない
 ようにされたのだから。」(ヨブ記 14:5) においても見ることができる。すなわ
 ち、両引用は定められた寿命を伸長することは空虚であり想像でしかないこと
 を意味していた。

21 Rupescissa (1597), p. 15 を参照せよ。

22 Rupescissa (1597), p. 13 を参照せよ。

23 括弧内の部分は筆者が補った。キリスト教世界では、人間の寿命は全て神によって生まれた
 ときから定められているとされている。

このような神が定めた寿命を延長することに対して、ルペシッサは

...ne forte (Adam²⁴) mittat manum suam, et sumat etiam de ligno vitae, et comedat, et vivat in aeternum. ...eum Dominus Deus de paradiso voluptatis, ut operaretur terram de qua sumptus est. Ejecitque eum: et collocavit ante paradisum voluptatis cherubim, et flammeum gladium, atque versatilem, ad custodiendam viam ligni vitae.²⁵

... 彼は手を伸べ、命の木からも取って食べ、永久に生きるかもしれない。... そこで主なる神は彼をエデンの園から追い出して、人が造られたその土を耕させられた。神は人を追い出し、エデンの園の東、ケルビムと、回る炎の剣とを置いて、命の木の道を守らせられた。(創世記 3:22~24)

を引用することで、人間が不死であるなら、死から不死を取り戻すことが可能であると主張した。この主張は、ベーコンが引用した聖書の家長が 1000 年間以上生きたという人間本来の寿命の長さを取り戻すことに関連している。但し、短期間で不死を取り戻すことが可能であると言っているわけではないことは留意しておく必要がある。つまり、今の人間では家長が過ごしたような悠久の時間を持たないために、不死を取り戻すことは難しいと言えるのだ。

2.2 第五精髓の提示

2.1 で述べたように、事前に神が人間に定めた寿命を延長することは幻想に過ぎないとされた。しかし寿命延長を実現するためにルペシッサは視点を変えた。

The first way is by natural death at the end of life determined for us by God, which

24 ルペシッサの原文内では括弧内が補われている。

25 Rupescissa (1597), p.13 を参照せよ。

we are not able to escape through any natural genius. Another way is by violent death; and in these two ways medicine is in vain.²⁶

とあるように、彼は、神が定めた自然死や暴力死など不可避であることは除外し、健康への怠惰に着目した。すなわち、定められた寿命が終わる前に身体の腐敗を防ぎ、身体を維持し回復するものや失ったものを再び手にすることができるものを事前に探求しようとする動きを目指したのである。そして死を避ける具体的な方法は、

Caeterum omne genus mortis vitare omnino citra illum terminum, non est in potestate nostra: veluti ex ictu fulguris, ex casu, ex violentia nobis supra vires illata.²⁷

如何なる点についても、終末の前に死を避ける他の全ての方法は我々の力によるものではない。すなわち落雷によるものであり、偶然によるものであり、与えられた力を越える我々の力である。

とルベシッサが述べているように、私たちの力の中に存在しているとしており、それは落雷による産物であり、偶然による産物であって与えられた力を越えた私たちの力だとした。

このような寿命延長を可能にするものは、身体の四元素や四性質のバランスを保つことで、肉体を腐敗させないもの²⁸である。しかし、ルベシッサは単にこれが四元素の性質を含むものではないと述べている。何故なら、この物質は星辰界²⁹にある物質であり、月下界にある四元素は存在していないためだ。そのようなものこそ、ルベシッサが呼んだ「第五精髓」そのものである。

26 DeVun (2010), pp.64-65 を参照せよ。

27 Rupescissa (1597), p.14 を参照せよ。

28 この物質の性質は他に生命の力や精気を再度手にし、増長させるものでもある。

29 月より下の世界が月下界であるのに対し、月より上の世界のことを星辰界と呼んでいる。また星辰界は身体とは異なり腐敗することがない。

第五精髓は他の全ての医薬とは性質そのものが異なる。全ての医薬は元素であり、四元素のいずれかに分類されるものであって、腐敗した物質によって機能していると考えられるためである。一方で、第五精髓は四元素ではない。この考えはアリストテレス自然哲学と密接に関連しており、とくにアリストテレスの『天界について (*De Caelo*)』における第五元素と同一の物質とされる³⁰。第五元素は四元素のどれとも同一の物質ではなく、星辰界にのみ存在する物質であるとされた。第五精髓も本来は星辰界にのみ存在しており、月下界には存在し得ないものであったが、何かのきっかけによって月下界に降ってきたとされた。死を避ける具体的な方法の一つとして落雷によるものであると先述したが、第五精髓が地上の物質に含まれるようになったのは落雷と関係があるかもしれない。

ルペシッサは第五精髓のより詳細な効用も具体例を提示することで述べているが、それは“...si quaecunque avis, aut carnis frustum, aut piscis infundatur in ea, non corrumpetur quam diu permanebit in ea...”「... 魚や鳥、人体の一部など全ての事物の中に第五精髓が流れ込むことで、それが体内に留まり続ける限り腐敗することはない ...³¹」に見られる通りである。何故なら、“...et ideo ista semper incorrupta manet, si clausa a volatu servetur.”「... それ故、もし逃げていくことから閉じ込められている状態で維持されるなら、それはいつも不滅に保たれるのである³²。」とあるように、事物を不滅たらしめる第五精髓がその中にある状態において維持される限り、如何なる生物の身体も不滅に保たれるからである。このような第五精髓の非腐敗性の性質は突飛な考えとして受け取られがちであるが、“Quod autem incorruptibilitati conferat, et a corruptibilitate praeservet, demonstrabo ex experientia assumpta ...³³”「また(第五精髓は³⁴)不滅な状態に持っていき、腐敗したものから保護するということを私は認められた経験から示す。」に見られるように、

30 『天界について』では、「... 第一の物体は土でも火でも空気でも水でもない何か別のものであるとして、最も上方の場所を「アイテール」と名付けた。」(アリストテレス、2013年、p. 28)とアイテールと第五元素を同一のものとする記述がある。

31 Rupescissa (1597), p.18 を参照せよ。

32 Rupescissa (1597), p.17 を参照せよ。

33 Rupescissa (1597), p.18 を参照せよ。

34 筆者が補った。

実際の行動に即したものであるようだ。また彼は第二の規範（*canon secundus*）の中で、星辰界と第五精髓の関連性についても述べている。すなわち、

Haec quinta Essentia est caelum humanum, quod creavit Altissimus ad conservationem quatuor qualitatum corporis humani, sicut caelum ad conservationem totius universi.³⁵

この第五精髓は、（月より上の世界の³⁶）星辰界が全ての宇宙の保護のためにあるように、最も偉大な者が人間の身体の四性質の保護のために創造した人間の星辰界である。

と記述があるように、星辰界が全宇宙の保護の目的で創造されたのと同じく、第五精髓は最も偉大な者³⁷が人間の四性質の保護のために創造した人間の星辰界であるとした。

ルペシッサは第五精髓の本質に迫るために星辰界にある太陽にも目を向ける。自然哲学ではアナロジーが重要視されてきたが、とりわけ“Sol (= quinta Essentia) quippe est filius solis caeli...”³⁸「何故なら太陽（第五精髓³⁹）は星辰界の太陽の息子だからだ...」とあるように、太陽と第五精髓と金の性質は同一のものに見なされてきた。言うなれば、月下界の第五精髓は太陽の性質を含んだものが月下界に降ってきたものと解釈できるのだ。また、第五精髓を手にするのは本来手が届かないような太陽の性質を手にするを意味している。ルペシッサが“(Sol⁴⁰) ...ex quo componitur lapis Philosophorum.”⁴¹「(太陽は) 賢者の石から作られるということから...」と述べるように、第五精髓は賢者の石からのみ抽出されるとし、それ以外の物質からでは第五精髓を手にするのは難しいとし

35 Rupescissa (1597), p.18 を参照せよ。

36 人間の保護のための星辰界的性質と宇宙の星辰界を区別するために筆者が補った。

37 ここで言う「最も偉大な者」とは全てを創造した神のことを指す。

38 Rupescissa (1597), p.19 を参照せよ。

39 筆者が補った。

40 筆者が補った。ここでの Sol は第五精髓のことを意味している。

41 Rupescissa (1597), p.19 を参照せよ。

ている。

ここで賢者の石について触れておくと、賢者の石は本来あらゆる卑金属を貴金属に変化させるものであるが、貴金属は四元素・四性質が均一である必要があり⁴²、賢者の石は不均一な状態を均一な状態へと是正してくれるものである。また、中世に入るにしたがって医薬としての効果を期待されるようになり、これは金属のみならず身体の四性質のバランスをも正してくれるものであると考えられたからである。逆に言えば、賢者の石を使用していないものはそのバランスが必ずしも均一であるとは言えない。そのような点において、賢者の石を使用して抽出した第五精髓こそいわゆる「純度が高い」医薬と言えるのに対し、そうでない第五精髓は「純度が低い」医薬と言わざるを得ない。ルペシッサは著書の中で“*Et aurum alchimicum, quod est ex corrosivis compositum, destruit naturam.*⁴³”「そして浸食されたものの要素である錬金術の金は自然を破壊してしまうのだ。」と述べているように、「純度が低い」第五精髓は自然を破壊してしまうということも述べている。

2.1、2.2において『第五精髓についての考察』を用いて寿命延長が述べられている部分を考察してきた。ルペシッサが目指した寿命延長は星辰界と月下界とのアナロジーを用いて、神によって定められた死が来るよりも前に身体の不滅性を再度手に入れることにあった。

2.3 パラケルススの体系とパラダイムからの転回

2.3では、ルペシッサらが残した寿命延長の体系から独自の体系へと転回したパラケルススの寿命延長論について見ていきたい。パラケルススは医者であり錬金術師でもあったが、彼が中世までの自然哲学者と異なることは何よりその体系構築の手法であった。ベーコンやルペシッサはガレノス医学などの古代からの学問の権威をそのまま継承していったが、パラケルススは第五精髓をある程度受け入れたものの、古代からの確固としたパラダイムに挑戦することでそ

42 対して卑金属は、健康ではない身体と同様に四元素・四性質が均一でない状態である。

43 Rupescissa (1597), p.19 を参照せよ。

の知識体系を 180 度変化させたのである。

パラケルススは膨大な量の著作を著したが、とくに第五精髓について述べているのは『アルキドクセン (*Archidoxen*)』(1526) であるから、当文献を用いて新しい体系を考察していく。

第一に、パラケルススは第五精髓のことを一種の物質であり「生命精気 (*spiritus vitae*)⁴⁴」と捉えていた。この生命精気は植物など生命を持った人間以外の全てのものに含有されるものとして考えられていた。よって、第五精髓は事物の生命精気であり人間の生命精気ではない。またルペシッサの体系からわかるように、第五精髓は不滅性を持つ性質であるから事物の生命精気は永続性を持つものであると言える一方で、人間の生命精気は死すべきものであるという認識がパラケルススにはあったようである。

しかし、第五精髓はハーブのメリッサやワイン、木、草、石などにも含まれているとされていた。これらは一般的には生命を持っていないと考えるのが普通であるが、パラケルススはその事物がそれである限り生命を持つと主張していた⁴⁵。ここで留意しておきたいことは、全ての物質に同じ量の第五精髓が含有されているわけではないということである。つまり石などはほんの僅かしか含まれていないが、ワインは第五精髓が多分に含まれているとされていた⁴⁶。

パラケルススはさらに第五精髓について風味など、どのような外面的側面を持つかを示してくれている。パラケルススはルペシッサと同様に第五精髓が全ての病気を癒すことを示しており、第五精髓の外面的特徴として風味であれば苦いものもあれば甘いものもあり、その役割であれば身体を若返らせるものもあれば健康に保つものもあると主張している。そして摂取した場合における身体への影響についても述べており、「そして、麻酔剤としてののみ、鎮痛剤としてののみ、催眠剤としてののみ ...⁴⁷」とあるように、催眠性や麻酔性の性質などを持つと著作内において指摘している。これが意味することは偏に第五精髓を摂取す

44 生命精気と古代で考えられた世界精気 (*pneuma*) との関係性は、生命精気は第五精髓、世界精気は第五元素に直接的な関連がある。

45 パラケルスス (2013), pp. 85–86 を参照せよ。

46 プリンチーペ (2018), p. 96 を参照せよ。

47 パラケルスス (2013), pp. 98–99 を参照せよ。

ることが重要ではないということである。すなわち、特定の病気を罹患した場合は特定の第五精髓を摂取しなければ健康状態を取り戻すことができないということを示している。

このような第五精髓を用いた療法を唱えることで、パラケルススはガレノス由来の四元素を用いた対症療法⁴⁸のパラダイムに挑戦した。パラケルススは従来のこの療法を否定し、先述したように第五精髓自体が特定の病気に対する効能を発揮するのだと主張した。このようなパラケルススの権威への挑戦的な態度は従来の自然哲学に新しい光をもたらすことになったのであり、医化学の誕生を促すきっかけとなった。

3. まとめ

本稿では、西洋中世の自然哲学における寿命延長の動きをルベシッサのヨハネスを中心に、ベーコンやパラケルススを引き合いに出すことで考察した。この第五精髓についての議論は初めに述べたように錬金術への深い理解に繋がり、さらには中世人の生命倫理の理解に繋がるのではないだろうか。更には、初めに述べたように金属の変成と寿命延長の動きを同時並行で研究していくことは錬金術研究において重要である。しかし、金属の変成の研究は進んでいる一方で、ルベシッサに関する寿命延長論を含んだ錬金術の研究は未だ発展途上にある。したがって、今後の錬金術の研究は寿命延長論を中心に、金属の変成と寿命の延長を二大柱として考えていくことで非常に意義あるものになるはずである。

参考文献

Crisciani, Chiara. (2021). Vecchiaia, morte e lunga vita. In Jacquart, Danielle. & Paravicini Bagliani, Agostino. (Eds.), *Le Moyen Âge et les sciences*. Sismel Edizioni del

48 対症療法とは四元素の均一を保つ療法である。例えば、乾の度合いが過剰でありそれに対応する湿の度合いが不足しているならば、湿の性質を持つ物質を与えて四性質のバランスを取る。

Galluzzo. 97–108.

DeVun, Leah. (2010). *Prophecy, Alchemy and the End of Time: John of Rupescissa in the Late Middle Ages*. Columbia University Press.

Furnivall, Frederick James. (1866). *The book of Quinte Essence or the Fifth Being*. Trübner&co.

Johannes de Rupescissa. (1597). *Ioannis de Rupescissa de consideratione quintae essentiae opus sane egregium*. per Conradum Waldkirch.

Paravicini Bagliani, Agostino. (2003). Ruggero Bacone e l'alchimia di lunga vita. In Crisciani, Chiara. & Paravicini Bagliani, Agostino. (Eds.), *Alchimia e medicina nel Medioevo*. Sismel Edizioni del Galluzzo, 33–54.

Paravicini Bagliani, Agostino. (2020). *Le monde symbolique de la papauté corps, gestes, images d'Innocent III à Boniface VIII*. Sismel Edizioni del Galluzzo.

Pereira, Michela. (2021). *Ars, Scientia, Donum Dei*. Complessità dell'alchimia. In Jacquart, Danielle & Paravicini Bagliani, Agostino. (Eds.), *Le Moyen Âge et les sciences*, Sismel Edizioni del Galluzzo. 81–95.

Peuckert, Will-Erich. (1965). *Theophrastus Paracelsus Werke, Band 2*. Wissenschaftliche Buchgesellschaft.

Catholic Bible. Retrieved from https://catholicbible.online/side_by_side/OT

アリストテレス、山田道夫、金山弥平訳『アリストテレス全集 5 天界について 生成と消滅について』（岩波書店、2013 年）

パラケルスス、澤本互訳『Archidoxen パラケルスス錬金術による製薬術の原論 第五精髓、秘薬（第一物質、賢者の石、生命の水銀、チンキ剤）、変成物、特効薬、霊薬、外用薬』（ホメオパシー出版、2013 年）

ヒポクラテス、小川政恭訳『古い医術について 他八篇』（岩波書店、1967 年）

ローレンス・M・プリンチャーペ、ヒロ・ヒライ訳『錬金術の秘密 再現実験と歴史学から解き明かされる「高貴なる技」』（勁草書房、2018 年）